



福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



Photo by Toyokazu Shimonoya 1995.9.26 若狭町気山

福井の自然史情報

消えた オオチャバネセセリ

以前は身近にいたはずの生きものを、最近見なくなったと思うことはありませんか。
福井県内では普通に見られた「オオチャバネセセリ」もそんな生きもののひとつです。
昆虫の世界だけでも、これまで見なかった種類の生きものを見かけたりと
さまざまな変化が起きているようです。



裏面に詳しい解説があります。



デスモスチルスの全身復元骨格は
6/28(木)から玄関ホールで展示するよ!!

第64回
特別展

樺太・千島

— 北の秘境に挑む —

2007年7/14(土)~9/24(月・振休) ※月曜休館

北海道のさらに向こうには、樺太と千島列島があります。
この場所は日本の領土だった時代があったことを知っていますか？

越前大野藩は、幕末に樺太まで船を出して探検し、漁場を開拓して交易しました。
このように意外にも福井とつながりのあった北方の自然を、博物館で体験しましょう。
北海道大学などから貸し出された、貴重な資料を間近でみるチャンスです。



太古の哺乳類 デスモスチルス

玄関ホールに展示される大型の全身骨格（復元）は、束柱類のデスモスチルスです。何といても、円柱を束ねたような歯が特徴的です。約2,000～1,000万年前に生きていました。福井県でもこの仲間のパレオパラドキシアの胸骨の化石が見つかっています。

デスモスチルスの全身骨格と臼歯
(所蔵：北海道大学総合博物館)



幕末の開拓者たち 越前大野藩の大野丸による探検

蘭学が盛んだった越前大野藩は、北方開拓に意欲を燃やし、幕府に許可を得て樺太を探検し、短い間でしたが領地も持ちました。山間の藩でもあるにもかかわらず西洋式の帆船大野丸を買い入れ、大野屋として交易した利益で藩財政の建て直しを図りました。



大野丸
(所蔵：大野市柳通社／画像提供：福井県文書館)

樺太国境の画定

日露戦争の講和後、日本は樺太の北緯50度以南を領有しました。このとき北緯50度の位置17箇所に国境標石が設置されました。今回は最も東の地点に設置された第一号標石の南面（日本領側）の拓本を展示します。



国境標石
(所蔵：小樽市教育委員会／画像提供：北海道大学総合博物館)

明治の研究者たち 北海道大学による研究の幕開け

明治期の北海道帝国大学では、樺太^{からふと}での自然史研究にも積極的に取り組んでいました。そこでは日本で最初に恐竜の化石が発見され、ニッポノサウルス・カラフトエンシスと名づけられました。今回は特別に、**必見**世界でひとつしかないホロタイプ標本を展示します。



ニッポノサウルスの頭骨の一部
(所蔵：北海道大学総合博物館／画像提供：小林快次・北海道大学総合博物館)

ちしま 千島列島編 Kuril Islands



火山活動と弧状列島

千島列島は、弓なりに島がならんだ弧状列島です。海底火山も多く、火山が現在も活動を続けています。奇岩が多く、神秘的な風景を形成しています。



千島列島ウシシル島
(画像提供：高橋英樹・北海道大学総合博物館)

ちしま 千島列島の固有種カタオカソウ

カタオカソウ(キンボウケ科)は千島列島だけに分布する固有種で、色丹島^{しこたん}が南限とされています。植物調査の専門家でもなかなか見つけることができないほどの稀な種です。



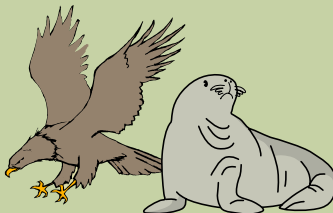
千島列島の固有種カタオカソウ
(画像提供：高橋英樹・北海道大学総合博物館)

さわってみよう コーナー



実際にさわって確かめてみよう！

- シマフクロウの卵って重たいの？
- オジロワシの羽ってどんな感じ？
- トドの牙は鋭いのかな？



シマフクロウの剥製
(所蔵：北海道大学総合博物館)



エトビリカ▶

海の鳥類・哺乳類



エトビリカの剥製
(所蔵：北海道大学総合博物館)

豊かな海には、陸上ではみるることのできない不思議な動物たちがたくさんいます。海鳥の例としてエトビリカやウミガラス、海獣の頭骨を展示します。また、日本でもっとも大きいフクロウである、シマフクロウの剥製も展示します。

紹介した以外にも、樺太^{からふと}・千島^{ちしま}の生物や鉱物などの資料が数多く展示されます！



カラフトフサカジカ
(所蔵：北海道大学総合博物館)



千島列島の溶岩と硫黄
(所蔵：北海道大学総合博物館)



◀シマフクロウ

北海道大学でしか買えない、**オリジナルグッズ**も
期間中だけ特別に販売します！

デスモチルスバンダナ
(画像提供：憐エルムプロジェクト)

消えた オオチャバネセセリ

しも の や とよかず

下野谷 豊一 (福井市自然史博物館友の会会長)

何かにつけ環境問題が話題となることが多いこの頃である。温暖化が問題になり始めてはや15年以上が経過しているが、この間に福井県の昆虫の世界にも数々のニュースがあった。ブタクサハムシやコルリアトキリゴミムシなどの外来種の侵入や、温暖化により北上し定着したナガサキアゲハやイシガケチョウなど、両手の指では数えられないほどの新たな種が見つかっている。

そんな中で、これまで普通に見られたのに急に全く姿を見せなくなった蝶がある。セセリチョウ科のオオチャバネセセリである[表紙]。「林縁の草地に広く分布し、どこにでも普通にみられる種」というのが、福井県内でのこの種に対する評価で、こんな蝶が急にいなくなることは考えたこともなかった。どうも姿が見えないなと気づいたのが2002年のことで、当初は発生時期の遅れ程度にしか考えていなかったが、次の年にも観察できずに終わった。どこかにいるはずと、過去に記録のあった場所を探し廻ったが、一頭も見つからないまま5年が過ぎてしまった。



■写真1: ホシチャバネセセリ (あわら市鎌谷)



どうしていなくなったのであろうか。その原因を知りたいものだが、残念ながらその糸口すら見えない。しかし、寒冷地のサハリン(ロシア)にまで生息している種なので、やはり昨今の温暖化の影響が最も疑わしい。そう簡単に絶滅することはないだろうと、期待しながら今年も探し始めているが、発生期に入った今もまだ姿がない。それにしても、生き物がいなくなったという証明は、何と難しいことか。

この他、蝶に限ってみても、消えたのはオオチャバネセセリだけでなく、ホシチャバネセセリ(県域絶滅危惧I類)[写真1]も姿を見せなくなり、絶滅が心配される。また、メスグロヒョウモン、ウラギンスジヒョウモンなども減少著しく、さらに、昨夏には奥越のブナ、ミズナラ林に生息するミドリシジミ類[写真2]が大凶作と表現されるほど少なく、一方、このブナ林には明らかに移動してきたと考えられる、飛び古した暖地性のムラサキシジミがチラチラ飛び、一瞬「ここはどこ」と思うほどであった。暖地性昆虫の北上は止まることを知らず、まさに地球規模での温暖化の影響がじわじわと迫りくるようで不気味でもある。



■写真2: フジミドリシジミ (赤兎山)

《あとがき》

古生物屋の私は、地層のでているところを見るばかりで、まわりの生きものにあまり気を留めてきませんでした。でも、この博物館だよりやHP更新のため、自然のニュースを探して、毎日過ごしていると、なんとなく昨年とは違うな、そんなことが気になってくるようになりました。地質年代のような長い時間での変化や数年ごとの変化など、色々なものさしで、自然を見ていくことが大事だと日々感じています。さてさて今夏の特別展、涼し〜い北の世界ヘレツゴです。福井の生きものとは、一味も二味も違った生きものたちが大集合します。外の世界を見て、再び福井の自然を見直してみるのもおすすめです。(安曾)

《交通案内》

【電車】

福井鉄道福武線 公園口駅 徒歩20分

【バス】

コミュニティバスすまいる:西ルート(足羽・照手方面)

愛宕坂バス停 徒歩10分

京福バス運動公園線(70号系統) 久保町バス停 徒歩15分

【徒歩】

JR福井駅から徒歩30分

《ご利用案内》

開館時間 ●午前9時～午後5時15分(入館は午後4時45分まで)

休 館 日 ●月曜日(祝日は開館)、国民の祝日の翌日、年末年始

入 館 料 ●高校生以上100円(20名以上の団体は半額)
中学生以下、70歳以上、
障害者および付添の方は無料